

日本人の自我発達と学校教育

山 添

正

1. 日本の小学校教育の特徴

40人のクラスで育つ日本の子供たちのことを考える時、スイスの学校は、筆者の長男という1外国人である、日本人の子弟のドイツ語の教育のために個人教師をあてがったり、授業は7, 8人という贅沢極まりない羨ましい制度だと思いました。

長男のクラスメイトの親たちに「日本では1クラス40人だ」と言うと、たいていの人が言葉を失ってしまう。彼等には15, 6人でも個々の子供に目くばりするのは難しいと考えています。そのため、実際の授業はそのクラスを半分に割り、7・8人で行うハーフ・クラス・システムをとっています。

しかし、一般に制度という物は裏表があるようです。子供中心に考えられたこのシステムも例外ではなく、意外なことに、今スイスの働く母親に評判が悪かった。クラスを半分に割るため、登校の時間が日によってまちまち、帰る時間もまちまちであるため働きにでる母親には大変不便なシステムです。ある人は「ハーフ・クラス・システムは、母親を働かせないように意図して作られたシステムだ」と言われるほどでした。今小人数は残して登下校の時間を統一出来ないかという議論がなされ、なんでも投票を行う直接民主主義の国ですから、それも投票で決着をつけようと議論がはじまっています。

日本は、狭い国土に、スイスの20倍以上の人口をかかえています。また日本の小学校の多くの子供たちの学力は、つねに世界のトップレベルを維持しています。¹⁾人口の多さから考え出された方法とは思いますが、日本人の得意なこの集団教育システムが「多人数教育」に世界的にすぐれたものであることを証明していると言えるかも知れま

せん。しかし、日本の教育も、よいシステムはどんどん取入れる工夫がほしいと思う。そうでないといつまでも「初等教育は日本、高等教育はアメリカ」とよく言われるように日本の教育は算数レベルの教育だけの先進国に終わってしまう。

この問題はもう少し真剣に議論される必要があるのではないのでしょうか。つまり、後の人生に小学生時代はどんな意味を持っているかと言う事を明らかにする必要があります。なぜなら、小学校教育は「単なる初等教育」としての知識の伝達を意味するものではありません。発達のみると、人間の能力の基本を決定する重要な時期であります。21世紀に生きる日本の子供達にどんな基礎的能力を育てるかそれは、その子供の人生のみでなく日本人にとっても大きな意味のある問題であります。小学生時代の教育がどれほど大切か、それを我々に推してくれる臨床事例を紹介しましょう。

筆者のケースで高校一年生の時、複雑な家族関係に悩んで自殺をはかった子供がいます。彼は、仮死状態で発見され、幸い人工呼吸を迅速に施した結果蘇生する事が出来ました。しかし意識障害がひどく意識の回復までには1週間かかりました。次に意識は回復しましたが記憶傷害が残りました。高校1年間の記憶の脱落が認められました。そして新しい事を覚えられない頑固な記名障害を被り彼はそれから4年間この障害と戦うことになるわけです。時には、絶望し家庭内暴力をふるったりし、苦しい戦いの毎日でしたがカウンセラーである筆者も若くあったので、今ではとても出来ないと思われる程の支援をしました。

4年間の本人のねばり強い努力の後、小学生の頃好きだった日本の歴史の知識を使って、すこし

づつ覚える訓練を始め、高校卒業を認める大学入学者検定試験にみごと合格しました。その後公務員試験に挑戦しました。紙面の都合でこのケースについては詳しく触れることは出来ませんが、彼は、そのプロセスで、小学生時代毎日日記を書いていた経験が生きて来ることになりました。数学は少し苦労しましたが作文は何の準備をしなくても、新しいことは何も覚えられないけれども「自然に文章はうかんでくる」と言って、見事に公務員試験に合格しました。

筆者は、あれだけの記名傷害を乗り越えた基礎には彼の小学生時代の自分の興味に基づいた、教育的訓練（例えば作文）があったと思います。中学校、高等学校のことは、わずかの障害で消えてしまう。しかし知的訓練でさえこのように「酸欠」を乗り越えて、小学校教育の痕跡は残るわけです。

人格的訓練はなおさら後の生活には大きな意味があるように思えます。つまり、小学校教育の中で学習したことは中学校・高校よりも生涯にわたって強く記憶され、それだけその個人の人生に大きな影響力をもつと考えられるわけです。家庭教育がその個人の人格の基礎を形成するとしたら、小学校の公教育の目的と方法が、どれほど日本人の国民としての社会的性格形成に影響してくるかをよく考える必要があるのではないのでしょうか。なぜなら、それは、日本人の性格をどう決定するかと言う議論にかかわってくるからです。

筆者の知人の幼稚園の先生が、そこは山梨でも歴史の古い幼稚園なので、最近外国からの研究生が見学に来ます。在る日アメリカから来た幼稚園の先生が、園長である彼に質問しに来ました。「どうして、みんな一緒に座らせて、一緒に授業をはじめめるのですか」と聞いたという。その時園長は、初めて幼稚園の一斉授業を「そういえば何故一斉なのか」と考えたと言います。彼女は「幼稚園で一斉授業をやったことがないので、そうした指導方法は出来ない」といいます。

日本人の「同調」傾向の強さとか「集団志向」等といわれることは、大学の教育にも、企業での教育にも影響されているわけですが、本当はもう

知らず知らずのうちに号令をかけられて一斉に動く訓練を、幼稚園から我々はうけているのです。だから日本人が、集団へのバイアスが大きいのは当然といえる。個人を重視する西欧人とその性格面で大きく違ってくるのは、その教育的背景がちがうからであるように思います。

「登校拒否の小・中学生が昨年（1988年）度は四万人の大打に達し、過去最多になった。……原因が様々であれば、解決の道もまた、色々だ。そのなかで一つだけ提案がある。学校の、一学級の児童生徒の人数をもっと少なくすべきだと思う。受持つ子供の数が少なければ、先生はイライラせず、一人一人に目もいきとどく。子供の気持ちも、より理解出来るであろう。それは登校拒否の原因を、一部であっても解消することにつながる。豊かな国、日本では40人に減らす計画がまだ終わっていません。²⁾

2. シュタイナー教育との比較

「日本の学校教育は、均質で質の高い労働力を生み出し、これが経済的な発展の基礎を作ってきたという評価があります。また治安がとてもよいことなど、社会が非常に安定している点も学校教育によるのではないかと評価され、海外からも日本の学校教育を参考にしようという向きもあります」³⁾

こうした評価にも関わらず、現代の学校では「不登校・いじめ・自殺」等の問題行動が深刻化しています。また、筆者は教育のことは素人ですが、前述しました「クラスの人数」だけでなく日本の教育については、一般に受験競争の激しさの批判から「詰め込み、知育偏重、個性軽視」

表1 日本社会と学校と子供の性格
(シュタイナー教育の特徴)

日 本 社 会	学 校 社 会	教育の特徴	子供の性格
会 社 主 義	集 団 中 心	個 人 軽 視	他 人 志 向
ノ ル マ 主 義	受 験 競 争	知 育 偏 重	道 徳 欠 如
タ テ 社 会	教 師 中 心	詰 込 み	創 造 性 の 欠
シュタイナー教育	生 徒 中 心	感 性 教 育	自 己 主 張

と言った子供の興味・主体性を無視しているという教育方法上の欠点が指摘されてもいます。

ところで、いま筆者が日本の学校と比較しようとしているスイスの小学校は4年生まで、お絵書きしたり、ゲームをしたり徹底的に感覚重視です。

この年齢の間は、日本の子供もドイツ語が分からなくても算数はクラスでトップでおれます。筆者の子供たちもそうでした。ほとんど授業は遊びのようなものです。自分のペースで、自分の個性、能力を良く見極め、無理せず、授業についていけないときは落第も厭わないのです。

このことに関して、先生も、近所のひとも何も言いません。これは全く驚きでした。日本なら小学校一年生で落第させるような先生がいたら、「みんな一緒」の思想に反するわけで本人の能力より、先生の教育者としての技能を問題にされるでしょう。

しかし、この学年を過ぎるとスイスの学校の勉強も急に難しくなり、宿題もたくさんです。場合によると日本の教材より難しくなります。日本の教育と似て来る訳です。この点に関して、日本の教育と徹底的に好対照をなしているのが、スイスの公立の学校よりむしろシュタイナー学校でしょう。

この学校ではいわゆる「日本の教育」と全く裏返しのような教育が行われているとっていいと思います。それだけに、日本の教育に批判的な人たちが注目するのはよく理解出来ます。私の友人にも子供さんをシュタイナー学校に通わせているかたがいました。

「それは素晴らしい教育だと思う。子供を迎えに行くと、今日習ったアルファベットの字が黒板に、素晴らしい絵の上に描かれている。それが毎日消されてしまうのです。それを消すのがもったいないという思いでその字と絵を見ていました。あれでは覚えるなどと言っても覚えますね。この教育が広がらないのがおかしい」

と賛辞をおしまないのは、スイスのシュタイナー

学校に娘さんを登校させていた知人の意見です。

シュタイナー学校では、徹底的に感覚・個性重視、教師の権威の否定を特徴とします。筆者の近所からシュタイナー学校に通っている生徒さんに意見を聞きましたが、当然のことながら当事者ですから「大変満足している」という返事が返ってきました。

スイスの知人は私にこのようにアドバイスしてくれました。

「女の子にインターナショナルスクールで英語をやるのであれば、シュタイナー学校にやって芸術家にしたほうがいい」

これは、スイス人の一つのシュタイナー学校についての評価です。シュタイナー＝芸術という考え方は、日本にシュタイナー教育を紹介した子安さんも強調しておられます。

「この学校で学んだ子どもたちが、1年生で勉強したことは何だったか、を後で振り返ってみるとする。彼らの思い出に浮かぶ物は、色と光とメロディーと響きと動きのシンフォニーであるに違いない。一年生でどれだけたくさんの絵を描いたことだろう。時間割という物があって、算数とか国語、外国語もあったけれど、そしてノートなどももらったけれど、実は圧倒的に絵と音楽だったのだ。机の脇に体を硬直させた勉強ではなく、すべての感覚をもてする体験だったのだ。それはつまり、本質的に芸術であった。」⁴⁾

また、もう一つの評価は、先述したように物事には裏と表の評価と関連します。

長男のクラスの父兄は、シュタイナー学校は知恵遅れの子が行く学校であると否定的なことを言っていました。

「スイスの学校の勉強についていけない子が行っている。また教師の権威を徹底的に否定するのが困る、教育には権威が必要」

と言う意見です。意外なことに、こういう考えを持った人の方が多いようでした。また、シュタイナー学校がスイスの学校進級システムと離れて独自であるのが、進学を考える親を不安にします。

筆者のスイスで住んでいた家の近くに、歩いて10分ほどの所にシュタイナー学校がありました。筆者は、長男を現地の学校にするかシュタイナー学校に入れるか随分迷いました。まず、子安さんのシュタイナー学校関係の本を何冊か読み直して見ました。

またスイスの知人にこの事を相談した。筆者の語学の先生のパウマンさんは「長男よりもインターに行っている長女を入れて、英語を覚えるより芸術をやったほうがいい」

また近所に住むビジネスマンのロイサーさんは「先生の権威を否定しているのでよくない」「正規の教育システムと異なるので、高校（ギムナジウム）進学の時困る」

他に、シュタイナー学校に自分の子供を通学させた経験のある人に意見を聞いて見たりした。またシュタイナー学校に行っている本人に話を聞いても見ました。

もちろん彼は「大変満足している」と言う意見だった。その過程で、シュタイナー学校の現実について幾らかの情報が入り、また知り合いも出来ました。日本人の子供も何人か通っていました。

例えばこんな子がいました。「一年生から4年間シュタイナー学校に通い、5年生に日本に帰った。まず学力が違いすぎ、本人の希望で一年落第した。また日本語が不十分のため、スイスドイツ語と日本語の分る先生を日本でみつけるのが大変だった」と言う話を聞くに及んで、筆者は長男を地元の小学校に入れる決心をした。

「筆者個人には、大変魅力ある学校ではあるが、日本へ帰って余りシステムが違い過ぎる教育は子供には困る」と言うのが理由だった。

しかし、毎日シュタイナー学校の前を通るので、

シュタイナー学校と関係がないことが残念だった。学校で催される、音楽会や演劇等は地元では評判がよかったので、筆者も見に行ったりしていた。筆者にはこの学校のシステムが日本と異なる事が、かえって大変興味ある事だった。そのうえ心理学者としてそうした教育を受けた学生卒業生達と同じ教育を受ける機会が与えられるというのは、シュタイナー教育の「結果」もしくは「成果」に直接触れることが出来るわけで、それは理論として学んで来きたシュタイナー教育の「実証」のように思った。夏休みにこの学校で、シュタイナー教育の講習会があると言うので申し込みました。

講習会は、10日間朝の8時15分から歌の練習に始まり、9時から講義、最初の5日間は遺伝学、後半はシュタイナーのテキストを使った人間の自由について、休憩の後、10時45分から昼まで個別セミナー。昼からは、芸術科目。筆者はオイリュトミーを選んだ。4時半からは6時まで午後のセミナー。夜は、毎日メニューが変わり、特徴あるシュタイナー建築である学校の講堂で、オイリュトミーのショー。映画。コンサート。詩の朗読会と続き9時半に終わる。そのハードさにスケジュールを見た時から驚いてしまった。

ドイツ語の洪水のなかに一日中居るので、帰って来るとくたくたに疲れて、幻聴のように昼間の講義のドイツ語が頭の中で反響しています。参考文献に目を通さないと明日の講義が理解出来ない。そのことが気になって、寝つかれない。何故か初日から胃が痛み出した。セミナーでは10日で岩波新書くらいのシュタイナー著の「ゲーテの色彩論」を読んでしまう。シュタイナーはいくら本を書いたかわからない人で、まだ出版されていない本もあるといひます。講演も何もかも本にするようです。一説では300冊以上だと言うので、64歳で亡くなっていますから年間10冊以上1ヵ月に1冊という信じられない精力で生きたことになります。講習会の雰囲気も何かそんな「エネルギー」「モーレッツ」という印象を講師の活動ぶりから感

じました。

一方、私はと言いますと、小人数で自分の意見を聞かれると言葉の不自由さを痛感するため神経をすり減らす。筆者が一番落ちこぼれてしまうと思ったのか講師の先生から、いちいち「君分りますか」と確認されると、本当に困った。周りの学生がいっせいに振り返るからです。そうなってくると講師の先生と目をあわすのが辛くなって、筆者はノートを取っているふりをする事が多くなった。

明るく日からは、昼休みは家へ帰って、昼寝をして、真夏の炎天下シュタイナー学校に出かけるようにした。そうしないと体がもたない。今考えると懐かしいですが、当時は登校の途中、「とんでもないことになった」と思った。早くも後悔し出した。しかし、その時現地校に通う長男がクラスで一言も発しない、インターナショナル校に通う長女はディスカッションに参加しない、三女が幼稚園を休みたがったと言う気持ちが、まざまざと理解できたのは思わぬ収穫でした。筆者だけ、ここでリタイアする訳に行かないと思いました。

講義・ゼミは逃げ出したい程だったが、昼からの芸術科目と夜のいろんなプログラムは楽しみだった。夜のプログラムは妻も連れて行った。学生たちは、主にドイツから来ていたが、フランス、イギリスからと言うのもいた。かれらは近くのユースホステルとか、キャンピング場等の安宿に泊り、昼休みは昼寝している筆者と違って、近くのグライフェン湖とかペフィカー湖でヨットやサーフィンを楽しんで午後の授業に出て来ていました。

まずよく言われる事だが、授業の討論の激しさは、子安さんの本等で読取っていた、シュタイナー教育で育った人間のイメージを覆されてしまった。やはりドイツ人だと思った。ゼミでいつも一緒だった、シュツットガルト大学の学生のゲルハルトは、農業経済専攻で、やはりシュタイナー学校育ちである。ミカイルは医学生、少し不良っぽいウーベ

は、緑の党の党員で、畜産専攻です。ゼミ・グループで、スイスの牧場実習に出かけた時、農家のおじさんに挨拶する前に牛の口をさすって牛に挨拶するほどの牛の専門家です。日本では余り知られていないが、シュタイナーの教育をうけた学生のなかには、環境問題にアプローチする人が多い。

筆者は最初、木を多く使った校舎、独特の角をとった丸みをもたした、建築の外観から、また8年間組がえなしで、同じ先生のもちあがり制度、評価をしないなどから、少し「みんな一緒」と言う日本的な匂いを感じ取っていた。

クラスのもちあがりシステムは、西洋の個人主義のアンチテーゼのように思われた。つまり集団の良さを導入しているように思われるからです。日本の大学までの集団教育つまり多人数教育は教育予算の不足を補う便宜的な方法ように思われるが、競走原理が強すぎて、序列が小学校一年生につくと卒業まで（あるいはそのあとも）そうした学校社会での地位にあまじなければならぬ欠点があり、日本の集団教育のありかたにもいろいろ問題があるが、シュタイナー教育の集団重視はなかなかおもしろいと思っていました。⁵⁾

しかしセミナーに参加して、とにかく彼等の自己主張に感心し、また先生が8年もちあがりは、先生自身の負担も大きく、それだけに自信と信念と実績を要求されます。生徒のほうにも、相性が悪くても担任という教師から逃げられないため徹底的な、ある時は対決すら必要とされるわけです。ゲルハルトによると「他の高給をなげうってでもやりたいというひとがいる」というのである。それは、何か教師のロマンをかきたてる所のあるシステムなのかもしれないと思った。だから、それは筆者の最初の印象と違って、彼等と話し合う中で、むしろ西洋「個人主義」の徹底した養成のようにすら印象が変わりました。「(西欧) 公教育のアンチテーゼ」を、日本に近付いているというようにとったのだけれども、実はその方向が逆だったのではないかと思いました。

この問題について、日本人の「自我」の問題をロジャーズ理論を参考にして考えてみましょう。特に、genuine という言葉を日本の初期のカウンセラーは誤解したのだと思います。「クライアントとカウンセラーの一致 (genuine)」のみに関心がいったことは、日本の文化の伝統から自然なことです。日本人は「本音」と「たてまえ」の分裂が日本文化の主流ですから、外に出さない「内なる自己」と外に表現された「外なる自己」の「一致」は、文化の課題ではありません。言い換えるとそれは、筆者が主張しているように日本人に取っての劣等機能になります。⁶⁾

ロジャーズの理論は、まとめると次の3つの原理から成っています。⁷⁾

① UNCONDITIONED POSITIVE REGARD

クライアントは、自分に対するセラピストの無条件の肯定的な配慮と感情移入的理解を少なくとも最小限度は知覚していること。一方、セラピストは、クライアントに対して無条件の肯定的な配慮を経験していること。

② EMPATHY

セラピストは、クライアントの内部照合枠を感情移入的に理解すると言う経験をしていること。

③ GENUINE

二人の人が接触していること、クライアントは、不一致の状態にあるか、傷つきやすい状態にあるか、不安な状態にある。セラピストは二人の関係の中では一致 (GENUINE) している関係にあること

こうした心理学理論を振り返りながらシュタイナーの理論を調べていると改めてすごい理論だと思わざるを得ません。つまり、ロジャーズの理論は対人関係のことしか頭にありませんが、それは心理学者として当然のことです。ところがロジャーズが人間関係で考えた「genuine」な関係を、シュタイナーは「人と物」つまり「認識」「芸術」レベルでも実践的に発達心理学的に考え教育現場を変える理論化をして行ったことです。

表2 対人関係の型と対物関係の型

	対人関係の型	対物関係の型
ロジャーズ	自→他 自←他	
日本人	× 自←他	自→物 ×
シュタイナー	自→他 自←他	自→物 自←他

3. 日本人と大学教育

ところで、スイスで日本の様な過熱した受験競争がないのは、職業学校を出てもギムナジウム (日本の高校) と大学を卒業した人たちとほとんど同じ給料を稼げる現実が大きいでしょう。

また、無理をして大学に進んでも大学が日本と違って大変厳しく、勉強しない人、出来ない人は容赦なく落とされます。例えば、チューリッヒ大学の医学部でもわりと簡単に入れる訳ですが、大学の勉強についていけなくなった場合、その人たちは何の資格もないので、転職に困る訳です。

たいてい転学部ということになるわけですが、それが大変容易です。日本の場合、ほとんど出来ないことが多いのが現状です。そのかわり、一緒に入学した者は殆ど一緒に卒業して行きます。

スイスでは、大学で厳しくふるい落とされるため、無理をしなくなるわけです。これは、本人の能力、適性によってふるい落とされる訳ですから、合理的と言えます。

例えば、筆者がしばしば文献を借りに出かけたチューリッヒ大学の日本語学科には新学期の登録者は70人位ですが、そのうち卒論を書ける人は2、3人だと言うことです。大学での振分けが大変厳しい訳です。従って、同じ年に入学した者が、4年後同じ年にはほとんど卒業する日本とは大分異なります。

筆者は、秘書のアダチさんの紹介でクロップシュタイン教授にそのことを質問したことがあります。筆者はそのころはまだ来たばかりで、よくこちらの考えが分りませんでした。

「そんなに厳しくして、学生やら、親ごさんたちが文句を言いにきませんか」「単位の足りない学生のために筆者が、その担当の教授に頼んで、単位をもらえるようにしたことがある」

こんな話を私は不用意に言うと、恐ろしく厳しい批判が返ってきました。

「それは一体どう言うことか、自分の教えていることに責任を取らないのか」

なぜ単位の取得と親の問題が関連するのか、学生の単位取得と筆者が関連するのか全く理解できないようで、筆者も段々何かおろかな質問をしているような気がして、その話題は打切りました。

この大学でのふりわけは、西洋人としての社会的自立の仕上でもあるわけで、彼等にとって、学業達成不十分なものを落第させる事は全く疑問の余地がないわけです。

こう考えると、日本の大学も単位の取得を難しくすれば今の受験競走は減るかもしれません。日本の大学で、実行している勇気ある人は大変少ないです。しかし、誰もそんなことを望んでいません。

というのは、日本の現実はそのような場合、自分の経験を言わせてもらおうと、まず学生本人にうられる、親が懇願しにくる、もし就職が決っていると採用先の人たちが怒る、後輩のその会社への就職に影響する。

ということで日本人のこの問題に対するこうした反応は、本人、家庭、大学、社会組織が学生個人の学業達成の視点を重視していない事の現れのように思えます。

それではその変わり何が強調されているのでしょうか。とにかく4年間で卒業「したい」、「させたい」、「してもらいたい」ことを示している。筆者の就職が決っていたのに卒業出来なかったゼミ生の経験をいわせてもらおうと、親は全くエゴイスチックそのもので、卒業して就職するのと、落第して

もう一年大学に残るのでは、世間体も悪く金銭面でもお金が「出る」「入る」で大違いであるので「なんとか卒業させてもらえないか」と懇願にられました。「夫を早く亡くし、女手ひとつで育てて来た苦労」を涙ながらに聞かされた。この時は筆者も「最大限の努力をする」といわざるをえなかったが肝心の学生本人が、卒業単位確認の時に「だいじょうぶです」と言い、いざ事務局が卒業学生の単位取得状況の一覧表をつくったときに、彼の言葉に反して必要単位が足りない事が判明した。このままだと次の日の教授会で、彼の卒業は不可能になってしまう。ところがその日彼はおらず、旅行先に筆者が電話し、すぐ帰宅をうながし、その間、単位の取れる可能性のある先生には筆者が電話してたのんだりした。「本人がこないといけない」と言う先生には、待ってもらい、本人を早く呼びよせて、行かせた。しかし足りない単位が多すぎて、結局駄目になった。

その時、母親に泣きつかれたとはいえ、「自分の単位でもないのにどうして筆者が、また母親がわざわざでてきて筆者に懇願などし、本人は他人ごとのようにしているのか」訳が分らなかった。

後で、就職先より「会社で採用内定した学生を卒業出来なくした場合、今後の採用は考えさせてもらおう」と言われたので、会社に筆者は謝罪に行き、また大学の就職委員より「今後こうしたことを繰り返さないように、大学の信用にかかわる」と言われて、大変な目にあった。

「日本の大学も単位の取得を難しくすれば」とは、実際に実行してしまうとこのように大変な面倒がともなうのです。

「そんなに厳しくして、学生やら、親ごさんたちが文句を言いにきませんか」

「単位の足りない学生のために筆者が、その担当の教授に頼んで、単位をもらえるようにしたことがある」

筆者のチューリッヒ大学教授への質問はこの経験に根差している。その日、旅行に行ってる学生

のために、彼に先生がたにあってもらえる時間をアレンジし、筆者は同僚に頭を下げつづけた。筆者はだんだん何か釈然としなくなった。

いよいよ卒業出来ないと決った時に、彼は元気をなくしてしまった。夜おそくまでかかったので、夕食を食べていなかった彼に弁当を買って、なぐさめた。それと同時に「来年は授業に出て、単位をとり、これ以上親不孝するな」といさめた。

もしそのまま続けていればその夜必要な単位をもらえたかもしれない、しかし、筆者はそれ以上の努力を打切った。彼も、筆者の打切り宣言に抵抗しなかった。

「それは一体どう言うことか、自分の教えていることに責任を取らないのか」というクロップシュタイン教授の反応は今も筆者の耳にのこっている。この日本人同志のおろかさを明らかにするため長々と書いて来た御粗末な、お話しは、彼からすると「全くおろかで、理解できないこと」であろうと思います。

「会社の方では学生個人の専門性の達成度は二の次で、会社によく同化してくれる新卒の学生を求める」⁸⁾

会社のこの同化の可能性の高さの新入社員への強調が、自分の専門性へのこだわりが少なくて同化能力がたかい、先程の言い方を真似るなら、日本人としての社会的自立つまり日本人の仕上でもあるわけで、彼等にとって、学業達成不十分でも、同化の可能性の高い学生を卒業させない事は全く信じられないわけです。

文 献

- 1) 山添 正 「心理学からみた現代日本の子供のエコロジー」 ブレーン出版 1992 p119
- 2) 朝日新聞 1989年11月1日
- 3) 山添 正 前掲書 p122
- 4) 子安美智子 「ミュンヘンの小学生」 中央公論社 1975 p86
- 5) 広瀬 俊雄 「シュタイナーの人間観と教育方法」 ミネルヴァ書房 1990 p169
- 6) 山添 正 「日本人の自我と家族関係の心理的考察Ⅱ」 1996 p134 親和論叢
- 7) ロジャース 「パースナリティ理論 ロジャース全集第8巻」(伊藤博編訳) 岩崎学術出版社 1967 p220-221
- 8) 杉本 良夫, マオア・R 「日本人は日本的か」 東洋経済新報社 1982 p20

表 3 学校教育と目的の比較

日本の学校教育	他人志向	同 調
欧米の学校教育	自己主張	自 立